INTERVIEW 談論風発

島 慶司
SHIMA Keiji

紀陽銀行
取締役専務執行役員大阪支店長

教育で地方は変わる
～地方創生における教育～

日本が明治時代に欧米の植民地にならなかったのは、教育が充実していて男女とも識字率が高かったからだといわれています。欧米に負けじと、教育に注力してきたことが日本の近代化と経済の発展を成し遂げる原動力となりました。大学進学が当たり前になった今はどうでしょう。もちろん優秀な学生もたくさんいますが、総じて教育のレベルが下がってきているのではないかと危惧しています。最近の社会人を見ていると、特に考える力やコミュニケーション力が低下しているように感じます。人口減少や人手不足が問題になっていますが、社会人として一定のレベルに達している人材が減っていることも日本経済の伸び悩みにつながっているのではないでしょうか。

2000年以降、各自動車メーカーがこぞって九州へ生産工場を移したのは、北九州周辺に工業系の専門学校や高校が多数あり、優れた工業系の人材を確保できたからだといわれています。ITやAIがいくら進化しようとも、企業が優秀な人材の知識や技能を求めることに変わりはないでしょう。生産年齢人口が減少するなかで、デフレを脱却してさらなる日本経済の成長をめざそうとするなら、一人当たりの生産性を向上させる必要があります。そのために最も重要なのは、教育の質を上げていくことです。

教育の向上のカギは地方にこそあると考えています。高等学校までの初等中等教育を地方独自の魅力あるものに変えることで、日本全体の教育水準を上げることや地方の活性化につながるのではないかと思っています。

私の地元の事例を紹介しますと、和歌山県立和歌山北高等学校というスポーツの盛んな学校があります。ここのスポーツ健康科学科では、授業の3分の1が体育の専門科目という特色のある教育が行われています。自転車部をはじめさまざまな運動部もあり、多くのスポーツ関係者を輩出しています。このように特定の分野に特化し、才能を伸ばしていく教育はとてもすばらしいと思います。まったくの私案ですが、中高一貫校にして、6年間でプロのアスリートや指導者、トレーナーを養成する専門性の高い教育をしてみるのも面白いのではないかと思っています。そうすれば全国から入学希望者が集まるのではないでしょうか。また、橋本市にある、私立のきのくに子ども村小中学校では、価値観の多様性をはぐくむことに重点を置いた、体験学習を軸とした教育が行われており、この学校に入るために他県から移住してくる人もいます。“子育ては和歌山でしたい”と思ってもらえるような教育を実現できることを願っています。

このように、スポーツ、芸術文化、理数、農業など地域の特色を生かした学校が各地方にできてくれれば、そこで学ぶために都市部から若い人が移り住むという人の流れが起こってくるでしょう。そうすればその地域の良さに気づき、地元で企業に就職したり、起業したりする人が増えるなど、よい効果が生まれると思います。

われわれ金融機関には地域経済を維持発展させるという大きな使命があります。当行では、和歌山県が実施している産業人材育成支援事業に協力し、和歌山大学の「和歌山企業トップ経営論」の講義に講師派遣を行うなど、将来を担う若い世代へ生の経済を伝える活動にも取り組んでいます。

教育は1年や2年で成果が出るものではありません。しかし、地域の活性化には欠かすことのできない要素ですから、長いスパンで考え、取り組むことが重要です。当行では、地域の人材育成に資する支援等を通じて、今後も地方創生に貢献していきたいと考えています。（談）